

なか

発行日 令和元年9月11日
発行 那珂市
編集 シティプロモーション推進室
〒311-0192
茨城県那珂市福田1819-5
E-mail city-p@city.naka.lg.jp
URL <http://www.city.naka.lg.jp>



目次 Contents

みんな大好き！那珂市の学校給食	… 2
菅谷まつり	… 4
那珂市と横手市 友好都市提携 15周年	… 6
水鳥 [®]	… 16
まち那珂topics	… 22
Information	… 24
さわやかさん ほか	… 28



水鳥

30

瓜連城と
常福寺

ここ数年、国道118号の拡幅工事に伴い瓜連・下大賀地区遺跡の発掘調査が行われ、新たな資料も多数発見されつつあります。また、市史編さん委員会による『中世那珂台地の領主』編さんや静神社による『静神社文書』の発行などを通して新たな課題も見えてきました。

これらの一部を紹介しつつ、今回は瓜連城と常福寺を中心にその歴史の概要を記します。

土器片墨書「倭文田長」の発見

この土器片（写真①）は、平成30年度の下大賀遺跡のうち国道118号の西側取付け道路敷設に伴う発掘調査によって発見されました。

『常陸国風土記』の中には「（久慈）郡の西□里に静織の里あり」とあります。静織

は、それまでの編み物と違って倭文部と呼ばれる織物を職業とする人たちによって織られたもので、それらは祭祀などに使われたものといわれています。そのため、後に静織は「倭文」とも記され、また「倭文郷」などの呼び名も

生まれました。静神社の祭神倭文神建葉槌命は武神であるとともに織物の神でもあったのです。「田長」は倭文郷一帯の田地を管理する役人であったと推定されます。

この「倭文」の文字が、墨書ではありますがこの地域から出土し、明記された文献として確認されたのは今回が初めてであるだけに、大変貴重な発見といえます。

なお、石岡市鹿の子遺跡から出土した漆紙文書の中の戸籍（750年から792年頃）にも倭文部の名を数人見ることができ、『万葉集』巻二十の防人の歌にも倭文部可良麻呂の歌が載っています。

下大賀遺跡の発掘により、この地には玉石を敷き詰めた古代の道が東西に走っていた

こと、久慈川を越えた薬谷地区（旧金砂郷村）に置かれた久慈郡の郡役所（郡衙）に近く、そこに納める税の貯蔵倉庫群

もあつたかとも推定されています。

瓜連城と楠木正家

西金砂山城に拠つた佐竹秀義を破つた源頼朝は、瓜連の地を家臣の二階堂氏・加志村氏などに与え、後には執権北条氏が直轄領（得宗領）として支配し、一族の北条貞国に与えました。

て、ここを抑えるために忠臣楠木正成を配しました。楠木氏は、元は駿河国楠木の荘（静岡市）に住む鎌倉幕府の御家人で、後に一族は河内国（大阪府）をはじめ諸国に散つたといわれています。が、楠木氏は正成・正行父子ともに最後まで南朝方に忠誠を捧げました。

北条貞国は、この頃に久慈川沿いの高台に瓜連城を構えたものと思われれます。その後、鎌倉幕府を倒し朝廷の権威・権力を回復しようとした後醍醐天皇は、陸奥国の入口に当たる要衝の地「瓜連」に注目し

この楠木正成は、自分の代わりに一族の楠木正家を瓜連城内に送り、正家は南朝方に味方して北朝方の佐竹貞義・

発見！



写真① 土器片墨書「倭文田長」



◀写真② 正家像（素鷲神社蔵）

義篤父子軍と激戦を続けました。このときに、瓜連方に加勢したのが筑波山麓の小田治久や那賀城（旧小瀬村）に拠っていた那珂通辰らです。しかし、この瓜連城は佐竹軍に敗れ楠木正家は脱出して東北の地に逃れ、後に楠木正行とともに大坂四條畷の合戦で戦死しています。瓜連の素鷲神社（牛頭天王社）には、「楠正家卿」と墨書きされた箱に納められた正家像（写真②）が保存されています。その台座の底には、「四條畷神社」と明記され朱の社紋も捺された証書が貼付されています。楠木正家の像であるとするれば、非常に珍しく貴重なものです。しかし、四條畷神社あるいは神社創建の奉賛会で制作されたものとするれば、御祭神の楠木正行公ではないかとも思われ



◀写真③ 木造地藏菩薩立像（西福寺蔵）

れます。実際に神社を訪問され、関係者から聞き取りをなされた素鷲神社の西野則文宮司のお話では、神社の近くに設置されている若く凛々しい正行公の像に似ているように思われるとのこと。しかし、楠木正行とともに戦い戦死している楠木正家と同じく顕彰していたとしても不思議ではありません。現在のところ、四條畷神社や関係者の間にはこの像は所蔵されていないとのこと。今後、この像についての情報が寄せられることを期待したいところです。

この楠木正成・正行父子の勤王は、同じく南朝方に味方した肥後国（熊本県）の菊池氏代々の勤王とともに称えられているところ。なお、常陸国二の宮と位置づけされた静神社やこの素鷲神社の勤王は、史料には現われませんが、瓜連の地にあっただけに南朝方に味方したものと思われ

■ 那珂通辰と小田治久

楠木正家軍に加勢した那珂通辰は、西金砂山途中から戻るも瓜連城落城のために退路を断たれ、増井（常陸太田市）の勝楽寺（正宗寺裏）近くで包囲され、やがて一族30余名が近くの一本松で自尽したとも処刑されたとも伝えられています。（写真④）

しかし「正宗寺系図」に「那珂一族一人逃げる」とあるのをはじめ、多くの史料には「通辰」の名が記されていません。通辰は、江戸時代中期になつて水戸藩の学者立原翠軒や小宮山楓軒によって見出されたのが始まりのようです。

後世忠臣と評された通辰が、南朝方を正統とする『大日本史』列伝の中でも採り上げられていません。わずかに江戸後期に編さんされた『大日本史』「志」の氏族「蒲生氏」の中で記されているに過ぎません。史料の考証に厳密であった『大日本史』がなぜ忠臣「那珂通辰」を採り上げなかったのでしょうか。編さんの初期には、まだ史料が見いだせなかったのであろうか、立原翠軒は何によって「通辰」を見いだしたのだろうか、「通辰」の存在は謎のままです。

【次のページに続く】



▲写真④ 一本松石碑（常陸太田市）

■ 浄鑑院の阿弥陀三尊像

常福寺からは、鎌倉時代作の厨子入阿弥陀如来立像及両脇侍立像（写真⑦）が発見されました。

時絵厨子の銘文、「この阿弥陀観音勢至三像は我が家に伝え在り、今、封内浄鑑院に寄す。以て克く四衆を供養す」と云う。貞享四年歳次丁卯十一月穀旦、水戸侯源光園識」（写真⑥）とあるように、徳川光圀の念持仏であった阿弥陀三尊像を浄鑑院に寄進したものです。

貞享4年（1687年）は、義公光圀が伯父武田信吉の菩提を弔うために新たに浄鑑院を建立することが決定された年です。

額田の向山に建立された「常照山浄鑑院常福寺」は、瓜連「草地山蓮華院常福寺」に代わって本寺となり、瓜連に寺を守護する院代が置かれました。浄鑑院は、烈公斉昭の社寺改革で一旦は廢寺となり、寺宝は寺績を含めて瓜連に戻されました。斉昭が失脚した後、浄鑑院はまもなく復活しましたが、幕末の天狗・

また、敗れた那珂通辰の子でただ一人逃亡したとされる通泰は、間もなく佐竹氏から妻を迎え、佐竹方に就いて活躍し、江戸郷（那珂市下江戸）を与えられ、その子の通高の代に姓を「江戸」に改めました。

それにしても一族を潰した敵方に、こうも早く忠誠を尽くすことができるのでしょうか。佐竹氏と姻戚関係にありながら南朝方に就き、敗れて筑波山麓小田に帰った小田治久も、吉野の忠臣北畠親房を匿ったものの佐竹氏に攻められて降伏、逆に近くの関城・大宝城に避難した親房らを攻めています。この反逆の姿勢は、一族一家を挙げて忠義を尽くした楠木氏や菊池氏の生き方とは大いに異なるものがあります。

■ 門部銀山寺観音堂の聖観音菩薩立像

常福寺は、14世紀に現在地より西方にある「白蓮塚」の地に、了実を開山として佐竹貞義によって建てられました。

この常福寺は、2代目聖岡の元中5年（1388年）に起こった瓜連宿の大火により

類焼しましたが、応永12年（1405年）に佐竹義宣が瓜連城内の現在地に移し再建しました。

佐竹氏は静神社の神宮寺として弘願寺や静安寺・西方寺を建立するとともに、城内に祀られていた牛頭天王社（素鷲神社）の再興を果たすなど、神仏の信仰にも努めています。

享祿元年（1518年）には、常福寺の末寺として門部の地に銀山寺が創建されました。

昨年、銀山寺境内の観音堂跡から発見された聖観音菩薩立像（写真⑤）は、胎内に記された墨書から鎌倉時代末期の永仁5年（1297年）に東

発見!



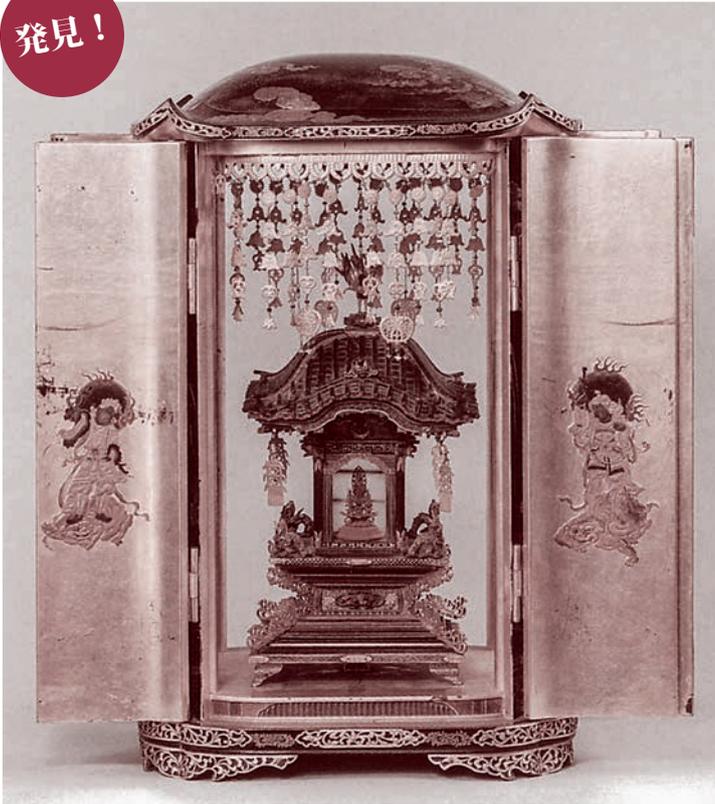
▲写真⑤ 聖観音菩薩立像（常福寺蔵）

京都台東区浅草の浅草寺の部材をもつて彫刻師快慶派の定快によって彫られたものであることが分かりました。この観音像が、いつ誰によって門部の地にもたらされたのかは今後の課題です。



▲写真⑥ 厨子銘文

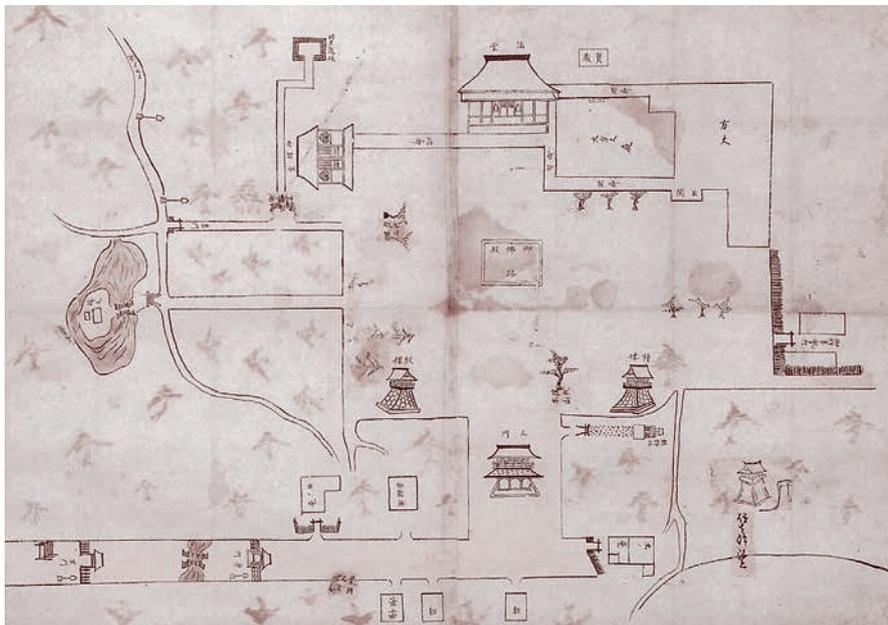
発見!



▲写真⑦ 厨子入阿弥陀如来立像及両脇侍立像 (常福寺蔵)

諸生の争乱で焼失してしまいました。
 義公が寄進したこの三尊像は、1・5 cm、脇侍0・8 cmの極小仏像です。
 義公は、必ずその行為の背景について記録を残しています。この像が大切に保存され、義公の意思が今日まで継承されてきた意義は大きいものがあります。

常福寺2世聖罔の功績と観音像・阿弥陀如来像は、10月に常福寺で拝観することができます。
 なお、常福寺に向山浄鑑院常福寺の境内絵図(写真⑧)が残っています。
 参道を西側から入ると黒門があり、橋を渡ってから門をくぐります。左へ折れると二層の山門があり、さらに進むと両側の鐘楼しょうろうの先に御師殿、回廊を渡って正面に法堂があり左手に位牌堂、右手に方丈・客殿があります。



▲写真⑧ 浄鑑院境内絵図 (常福寺蔵)

鐘楼の左手奥には弁財天が祀られています。現在の那珂第二中学校の敷地を含む東側の杉樹の森一帯が境内でありました。実に広大な規模であったことが分かります。
 当時は300人からの修行僧が学問に励んでいたともいわれます。水戸家藩主の位牌

堂があり、歴代藩主の法要や現藩主の太田瑞竜山の墓参には必ず参拝した水戸家の菩提寺でした。さらに、この浄鑑院の裏手に「温泉山」があり、鉱泉が湧き出していたといわれます。明治期から昭和初期にかけて、鉱泉宿が栄えていた頃の銅版画も残っています。

那珂市埋蔵文化財出土品展を開催しました

7月20日から9月1日まで歴史民俗資料館で「那珂市埋蔵文化財出土品展」を開催しました。今回の「水鳥」で取り上げた土器片墨書「倭文田長」をはじめ、那珂市内の遺跡で見つかった貴重な出土品の数々に、訪れたかたがたは那珂市に流れる歴史の息吹を肌で感じていました。

